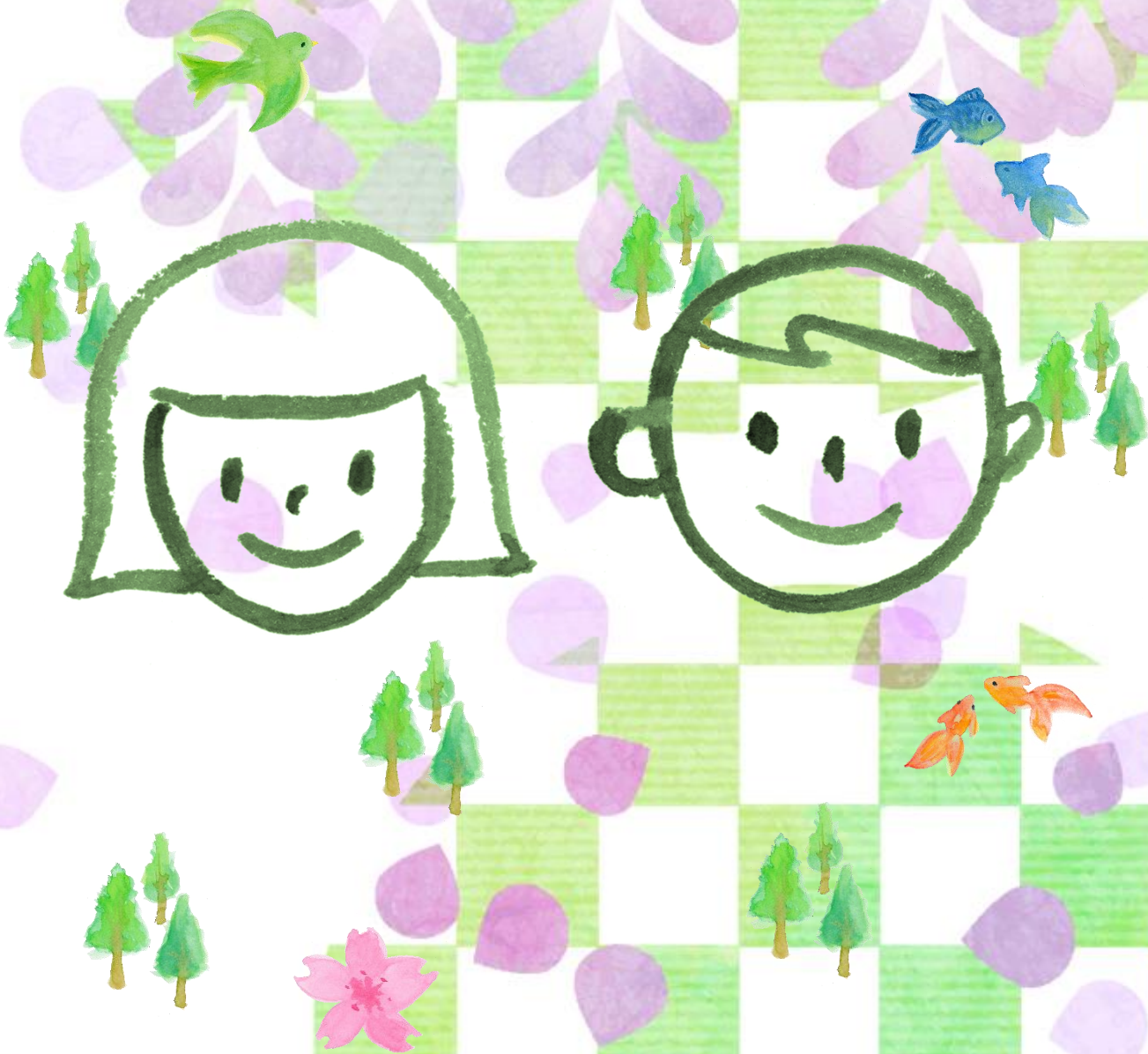




江南市版 福祉教育ハンドブック

ふだんの くらしの しあわせの実現に向けて



社会福祉法人 江南市社会福祉協議会

目 次

	はじめに、ハンドブックのねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	第1章 学校における福祉教育の必要性とは・・・・・・・・・・	2
	必要性と大切にしている視点	
	第2章 江南市社会福祉協議会が取り組む福祉教育・・・・・・・・	3
	福祉実践教室やふくし学習プログラムなどの紹介	
	第3章 福祉実践教室のプログラム紹介・・・・・・・・・・	5
	(1) 車いす教室	
	(2) 手話教室	
	(3) 要約筆記教室	
	(4) 点字教室	
	(5) 視覚障がい者ガイド教室	
	(6) 盲ろう者通訳ガイド教室	
	(7) 高齢者疑似体験教室	
	(8) 知的障がい者理解促進軽スポーツ教室	
	第4章 ふくし学習プログラムの事例・・・・・・・・・・	13
	事例1：ふくし交流会・ふくし年間プログラム	
	事例2：ふくしってな～に？ ～ユニバーサルデザイン学習～	
	事例3：防災とふくし ～被災地の様子やクロスロードで学ぼう～	
	第5章 学校と社協との福祉教育の進め方・・・・・・・・・・	18

はじめに

このハンドブックは、学校などにおける福祉教育を進めるため、主に学校の先生に向けた手引書として作成しました。

江南市社会福祉協議会（以下、社協）は、地域福祉の推進を図ることを目的とする団体です。地域福祉を推進するためには、地域の中にある無関心や偏見、差別に対して向き合い、一人ひとりが学びを深めていくことが必要です。そのためには福祉の学びが必要となります（福祉教育）。

社協では、「ふくし」を「**ふ**だんの**く**らしの**し**あわせ」というメッセージとして伝えています。その言葉の意味には、「ふだんのくらしのしあわせ」の中心に、まず自分という存在があること、障がい者や高齢者などの支援を必要とする人のこと助けてあげるのがふくし、という福祉意識を変えていく意味が込められています。

そのため、地域の中で誰もが排除されずに、社会的孤立に陥ることなく、多様な存在や関係性が大切にされ、お互いに支え合いながら共に生きていくことが大切となります。

子どもたちの「生きる力」を育むためには、学校での学習を土台にして、子どもたちの学びの場が、町内会などの地域活動や休日でのボランティア活動などに広がり、地域住民のみなさんとともに地域の福祉への自発的・主体的な行動につながり、そのことが子どもたちの「生きる力」につながっていくよう、日々の授業の中でハンドブックをご活用いただければ幸いです。

本書のねらい

「総合的な学習の時間」や各教科・領域の中で、子どもたちの「豊かな人間性」や「生きる力」を育むための指導計画の参考になるよう、以下の基本的なコンセプトのもとに作成されています。

ハンドブックの活用を通して、学校や地域で新たな福祉教育の実践が生まれ、広がっていくことを目指すものです。

福祉教育の基本コンセプト

「共に生きる力」を 育む

子どもたち一人ひとりが、自分自身が価値ある存在であること（自尊感情）や命を大切にすることを学び、「共に生きる力」を育みます。

体験的な学習を 大切にする

子どもたちが自発的に考え、自分なりの気づき・理解に到達するための体験的な学習を大切にします。

地域の一員としての 意識を育てる

地域のさまざまな人たちとの出会いを通して、共に暮らす地域の一員としての意識を育てます。

第1章 | 学校における福祉教育の必要性とは

社協は、福祉教育を進めるうえで、以下の3点を大切にしています

● 「共に生きる力」を育む ～教育と福祉の共通する理念～



教育と福祉は、入り口や素材は異なっても「人間の尊厳」や「相手の立場に立って考える心」や「共に生きる力」を育むという基本理念で共通しています。子どもたち一人ひとりが、自分自身が価値ある存在であること（自尊感情）や命を大切にすることを学び「共に生きる力」を育むことが大切です。

福祉（ふくし）とは、すべての人が「**ふ**だんの**く**らしの**し**あわせ」を実現させることであり、その根拠は、「生存権保障」（憲法第25条）と「幸福追求権」（憲法第13条）です。すべての人が尊重される社会をめざすノーマライゼーションの考え方の理念を広めていくことは福祉教育の目的です。

福祉（ふくし）とは「**ふ**だんの **く**らしの **し**あわせ」を実現させること

● 体験的な学習を大切にする ～同情から共感へ～



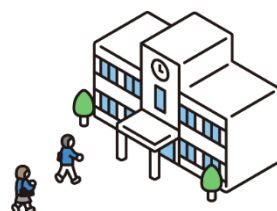
福祉（ふくし）の「何を」学ぶかということだけでなく、「どのように」学ぶかで学習内容や効果は大きく変わります。車いす・手話・点字などの疑似体験や技術習得のみを目的とした体験学習は結果として「障がい者はかわいそう」といったマイナスの福祉観を生む場合もあります。

福祉を学ぶとは「対象化」することではなく、「自分ごと」として毎日の暮らしの中にある「いのち」「生活の大切さ」を学ぶことにあります。「ふくし」は全ての人を対象であり、新しい福祉観や・障害観（ICF〈国際生活機能分類〉）を意識し、リアリティのある体験学習の場を広げていくことが大切です。

● 地域の一員としての意識を育てる ～学校と地域における福祉教育の可能性～

地域社会における人間関係の希薄化は、家庭の養育環境や地域のコミュニティ機能にも大きな影響を与えています。子どもたちは学校も含め地域の中で生活しており、地域の教育力や福祉力を活用して、地域全体で学んでいく取り組みが福祉教育には有効です。

地域の中に足を運ぶ、人と関わる中で、地域の中で必要とされている支援を考え、地域のニーズに自らが気づき、「自分たちには何ができるのか」という問題解決能力を身につけ、子どもたちが地域の一員としての意識を持つことが、地域づくりに繋がっていきます。



愛知県社会福祉協議会『地域・学校・社協ですすめる 福祉教育ハンドブック～共に育つ力を育む～』（令和3年3月）から一部抜粋



社協は、地域や学校と協力しながら、



子どもたちのふくしの学びを深めるための事業を行います

● 福祉実践教室事業 ～地域・生活課題に気づき、日常的な実践活動へ～

昭和56年の「国際障害者年」を記念し、障がい者の正しい理解と福祉向上を目的として始めました。現在は、車いす、手話、要約筆記、点字、視覚障がい者ガイド、盲ろう者通訳ガイド、高齢者疑似体験、知的障がい者理解啓発促進軽スポーツを実施しています。

※各科目の流れや学習の目的はP5から詳しく紹介しています。

● 福祉教育プログラム開発モデル事業 ～様々な視点から「ふくし」を学ぶ～

近年、地域を取り巻く環境の変化により「ふくし」の課題も多様化・複雑化しています。様々な切り口から「ふくし」の学びにつなげていき、地域や学校と協力しながら、新たな福祉学習プログラム実施のサポートを行っています（生活・防災・地域交流・キャリア教育など）。

※実践事例をP13から詳しく紹介しています。



▲車いすの講師に興味津々の子どもたち



▲視覚障がいの講師の生活道具を紹介



▲聴覚障がいの講師と要約筆記でおしゃべり①



▲聴覚障がいの講師と要約筆記でおしゃべり②

● 介助犬 PR 事業 ～介助犬の理解の促進・啓発～

平成 24 年から毎年、市内小学校に対して、社会福祉法人日本介助犬協会にご協力いただき、介助犬の正しい理解と啓発を目的に「介助犬教室」を開催しています。



● 子ども福祉塾事業 ～地域の中で気づき、ふくしに関心を持つきっかけに～

平成 10 年より、地域をフィールドにした福祉教育を小学 4～6 年生を対象に休日を活用して実践しています。ボランティアグループや地域の方、大学生や社会人のサポーターなどと協力し、地域で学び・気づき・振り返りを行い、ふくしに関心を持つきっかけづくりを行っています。



▲買い物に困っている高齢者のご自宅まで必要なもの（水やお米など）をお届けする 1day お助け隊活動

● 夏休み福祉体験学習事業 ～青少年の社会参加と福祉教育の推進～

中学生、高校生を対象に、夏休み期間に福祉施設、保育園などへのボランティア体験活動を行っています。※小学生からのボランティア活動の相談は個別に対応します。

※その他にも相談に応じて福祉教育のサポートを行っています



科目1 車いす教室（対象学生：3年生～）

車いす利用者、施設職員が講師となり、当事者のお話や車いすの操作方法の説明、介助方法を体験し、車いす利用者のくらしの理解や支援方法などを学びます。



● 進行内容（45分の場合）



時 間	内 容	留意事項
10	当事者からの「くらしのお話」 車いすを利用するきっかけやふだんの生活について。	・生活の様子や困っていること、また本人ができることにも着目する。
10	車いすの操作方法の説明 各部位と機能や乗り方、降り方について。	・各部位の役割を理解する。 ・車いすの正しい使い方をしないとけがのおそれがあることを理解する。
20	車いす体験（介助体験） 2人1組ペアで介助者と乗る人を交代しながら、車いす体験を行う。 ※クラスをグループに分けて、2人1組のペアをつくり実施する。 	・乗っている人が不安にならない介助の仕方や声かけなどのコミュニケーションの必要性を考える。 ・段差などの介助で乗り越えられないときのサポート方法を学ぶ。
5	まとめ、質疑応答	

● 「車いす教室」車いす利用者Sさん からメッセージ



- 私は一人で電車に乗って遊びに行くことができます。しかし、段差やエレベーターがない場所では移動することができません。車いす利用者の目線で暮らしやすい工夫を考えてもらうきっかけにしたいです。
- 車いすは私たちにとってはみなさんの「足」と同じ役割です。乗り物体験にならないように、車いすの生活のお話や介助体験を伝えていきたいです。

科目2 手話教室（対象学生：3年生～）

聴覚障がい者、ろう者、手話通訳者が講師となり、当事者のお話や手話などを体験し、聴覚障がい者、ろう者のくらしの理解や意思疎通に必要なコミュニケーション方法などを学ぶ。



● 進行内容（45分の場合）



時 間	内 容	留意事項
10	当事者からの「くらしのお話」 事前に「耳の聞こえない人が困ること」を考えてきてもらい、子どもから講師へ伝え学びを深めていく。 【事前学習】（協力依頼） 子どもたちに「耳の聞こえない人が困ること」を事前に考えてきてもらう。	・「困ること」と合わせて「工夫していること」も伝え、講師のくらしを理解する。 
30	コミュニケーション方法の紹介、体験 ①身振り（体の動きで伝える） ②口話（口の動きで伝える） ③空書（空中で文字を書いて伝える） ④筆談（紙に文字を書いて伝える） ⑤指文字（手の形で文字を伝える） ⑥手話（手話で言葉を伝える）	・聴覚障がい者のコミュニケーション方法は手話以外にも多くあることを知り、手話ができなくても聞こえない人とコミュニケーションをとる方法があることを理解する。
5	まとめ、質疑応答	

● 「手話教室」ろう者（生まれつき聞こえない人） Kさんからメッセージ



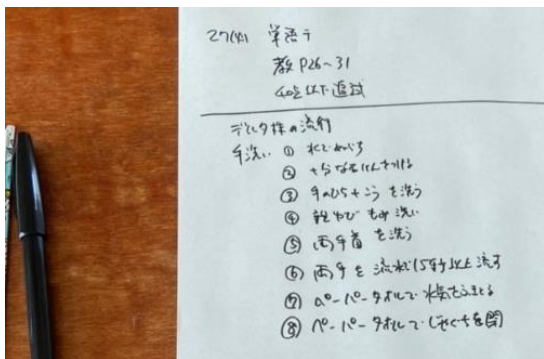
- 私はテレビでお笑い番組を見ることが好きです。しかし、字幕がついていないものは何を話しているのか分かりません。「聞こえない方は生活の中でどんな場面で困るのか？」を想像してもらうことから学んでほしいと思います。
- 手話は便利なものではなく、みんながお話しをしたり、書いたりしている言葉と同じ「言語」であることも理解してほしいです。

科目3 要約筆記教室（対象学生：4年生～）

聴覚障がい者（難聴・中途失聴者）、要約筆記者が講師となり、当事者のお話や要約筆記（文字で書いて伝える）を体験し、聴覚障がい者（難聴・中途失聴者）のくらしの理解や意思疎通に必要なコミュニケーション方法を学ぶ。

● 進行内容（45分の場合）



時 間	内 容	留意事項
10	当事者からの「くらしのお話」	
15	聴覚障がいの生活体験の紹介 ①聴覚障がい者の生活 DVD 視聴 ②字幕付き・字幕なしのアニメ視聴 ③生活道具の紹介など （スマホの音声文字変換アプリなど）	・聴覚障がい者にとって、文字の情報が大切なことを理解する。 ・生活の中で聞こえないことはどんなことかを理解する。
5	要約筆記体験の説明 文字で書いて伝える要約筆記のやり方	
10	要約筆記体験（個人ワーク） 講師がアナウンスする例文を要約筆記体験（会話や放送案内の内容を要約してかく） 	・紙とペンがあれば聞こえない人とも関わるができること、困ったときにサポートができることを理解する。 
5	まとめ、質疑応答	

● 「要約筆記教室」難聴者 H さんからメッセージ



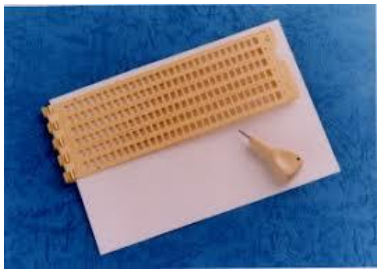
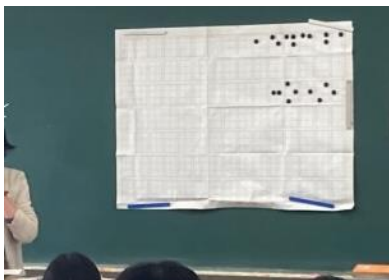
- 私はどこにでも行けるし、自分のことは自分でできますが、会話の仲間に入らず疎外感や孤独感を感じる事が多々あります。そんなときに文字で書いてコミュニケーションする方法がとても嬉しかったことを覚えています。
- 「助けて、手伝ってほしい」と声をかけられたときは、本当に困っているときなので、その時のために誰でもできる支援方法を学んでほしいです。

科目 4 点字教室（対象学生：4年生～）

点訳ボランティアグループが講師となり、視覚障がい者の利用する道具紹介を行い、視覚障がい者のくらしの理解や正しい点訳方法（点字の基本的な打ち方や読み方）などについて学ぶ。



● 進行内容（45分の場合）

時 間	内 容	留意事項
5	視覚障がい者のくらしや道具の紹介 点字が使われている身の回りのもの（調味料、シャンプーなど）を紹介する。	・身の回りに点字がたくさん使われていることを理解する。
10	点字一覧表を使った点訳方法の説明 ①点字の組み立て方 ②五十音、数字の表し方 ③点字のルールを説明 ※黒板でマグネットを使いながら説明	・点字は視覚障がい者にとって大切な情報であることを理解し、点字の成り立ちやルールがあることを理解する。
5	点訳体験の説明	
20	点訳体験（個人ワーク） 黒板に書かれた点訳の例文を点訳体験（例：自分の名前、学校名など） 	・点訳体験時、講師が校正を行うことで、正しく情報を伝える意味を理解する。 
5	まとめ、質疑応答	

● 「点字教室」点訳ボランティアグループ うさんからメッセージ



- 視覚障がい者が情報を得る方法は音声や点字など様々です。その中で点字について、どんな場所にあるのか、どのように読み書きをするのかを理解していきます。
- 視覚障がい者の生活を想像してもらうとともに、点字が視覚障がい者にとって、大切な情報になっていることも伝えています。

科目5 視覚障がい者ガイド教室（対象学生：4年生～）

視覚障がい者、ガイド普及ボランティアが講師となり、当事者のお話やガイド方法の体験を通して、視覚障がい者のくらしの理解や支援方法などについて学ぶ。



● 進行内容（45分の場合）

時 間	内 容	留意事項
10	当事者からの「くらしのお話」	・視覚障がい者にとって、できること、できないことを理解する。 ・ふだんのくらし（家での生活、趣味、活動内容等）を理解する
15	視覚障がい者の歩行ガイドの説明 ①歩行ガイド資料の確認 ②動画視聴による支援方法の確認	・ガイド方法のよい例・わるい例を学び、ガイドするうえでの大切なことを理解する。 ・歩行ガイドの方法だけではなく、どのような声かけが大切なのかを考える。
10	声で伝えるガイド体験 当事者講師に声のみでガイド体験 ①ご飯の位置を伝える ②交差点の状況を伝える	・ご飯の位置を伝えるガイド体験では、食べ物以外に、温度や周りの状況などをガイドできるよう理解する。 ・体験を通じて、専門的知識の有無に関わらず、自分にできることがあることを理解する。
10	まとめ、質疑応答	

● 「視覚障がい者ガイド教室」視覚障がい者 Wさんからメッセージ



- 目が見えないと何もできないと思われがちですが、慣れている家では、掃除、食事、運動など一人でできます。でも、不慣れな場所では不安ことが多いです。ガイドがあることで安心して生活することができます。
- また声や音が目の見えない方にとって大切な情報になることを子どもたちに伝えていきたいです。

科目6 盲ろう者通訳ガイド教室（対象学生：4年生～）

盲ろう者、通訳者が講師となり、当事者のお話や手のひら書きなどを体験し、盲ろう者のくらしの理解や意思疎通に必要なコミュニケーション方法等を学ぶ。

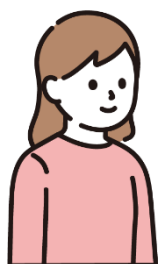


● 進行内容（45分の場合）



時 間	内 容	留意事項
5	当事者からの「くらしのお話」	・盲ろう者は「全く目が見えない、聞こえない」という人のみではないことを理解する。
10	盲ろう者のコミュニケーション方法の説明 ①手のひら書き →手のひらに文字を書いて伝える ②触手話 →手話で表現し触ってもらい伝える ③プリスタ →紙テープに点字を打ち出し伝える ④指点字 →指を点字タイプライターに見立て伝える ⑤ローマ字式指文字 →指文字を手のひらにあて伝える	・当事者はそれぞれ自分に合ったコミュニケーション方法で、自分の言葉を伝えていることを理解する。 
5	通訳者の役割の説明	
15	手のひら書きの体験（通訳体験） ①2人1組ペアで手のひらに文字を書き、伝える。（終了後、交代し両方を体験） ②言葉を講師に手のひら書きで伝える。	・体験を通して、触覚を活用したコミュニケーション方法を理解する。
10	まとめ、質疑応答	

● 「盲ろう者通訳ガイド教室」盲ろう者 Kさんからメッセージ



- 盲ろう者のコミュニケーション方法は、それぞれの生き立ちによって異なることを伝えています。得意なこと苦手なことも様々です。
- 目と耳、両方に障がいがあるため、移動や活動には時間がかかることも周りに理解してもらい、一人ひとりが気にかけてくれると嬉しいです。

科目7 高齢者疑似体験教室（対象学生：4年生～）

高齢者疑似体験ボランティアグループが講師となり、高齢者の疑似体験や介助方法、講話などを聞き、高齢者のくらしの理解や支援方法などを学ぶ。



● 進行内容（45分の場合）



時 間	内 容	留意事項
5	高齢者って、どんな人？ 芸能人年齢並び替えクイズ （写真を使って年齢順に並び替えを行う）	・子どもたちが想像する高齢者がどのようなイメージなのかを確認する。
10	高齢者の特徴って、どんなところ？ ①高齢者と聞いて、思いつくことは？ ②どんな身体と心の変化があると思う？ ③どんな生活の困りごとがあると思う？	・高齢者の体験をする前に、年を重ねる中での身体や心の変化、生活の中で困ることを考える（個人ワーク）。
20	高齢者の生活疑似体験（グループワーク） 4つの班に分けて、ブースごとに説明・体験する。（各机で体験を行う） 【体験内容（A・Bどちらかを体験）】 A：食事や買い物体験（手指の感覚の体験） B：散歩や書類を書く場面（視覚の体験）	・体験道具を準備し、色の見え方・お箸や小銭の取り方など、高齢者の身近な生活を疑似体験し、身体と心の変化を理解する。  
5	高齢者の生活場面の気持ちを考えるワーク （レジの支払いの場面、横断歩道の場面）	・体験した身体の変化を踏まえ、高齢者の立場になって、気持ちや理由を考えるワークを行う。
5	まとめ、質疑応答	

● 「高齢者疑似体験教室」高齢者ボランティアグループ Sさんからメッセージ



- 私たちの活動は「高齢者が大変なこと」を伝えることではありません。高齢者に関心を持ってもらい、くらしを理解してもらうことが目的です。
- 子どもたちには、高齢者の否定的な面だけではなく、誰でも年を重ねていくことの意味や生活の中での困りごとなどを伝えていきたいです。

科目8 知的障がい者理解促進軽スポーツ教室（対象学生：4年生～）

知的障がい者、施設職員が講師となり、一緒にボッチャの体験を通じて、知的障がい者のコミュニケーション方法や特性を学ぶ。



● 進行内容（45分の場合）

時 間	内 容	留意事項
5	当事者から「暮らしのお話」 施設職員から「障がい施設」の説明	・知的障がい者がどんな特徴や得意なこと、苦手なことがあるのか、話を聞き理解する。
35	軽スポーツ（ボッチャ）の体験会 4つの班に分けて、コート2面で実施。当事者と子どもたちがチームとなりボッチャを体験する。 ①ボッチャのルール説明 ②当事者からボッチャのお手本 ③チームごとに試合	・コミュニケーションが苦手な当事者にとって「ボッチャ」がどんな存在なのかを考える。 ・ボッチャを通じて、当事者と子どもたちが同じ時間を共有する中で、障がい有無に関わらず一緒に楽しめることや身近な存在として、「嬉しい」「くやしい」などの気持ちをチームで分かち合い、身近な存在としてお互いの壁をなくしていくきっかけとする。
5	まとめ、質疑応答	



● 「知的障がい者理解促進軽スポーツ教室」施設職員 Oさんからメッセージ



- 当日は施設利用者も不安になることもあり、また子どもたちも「ちょっと変わった雰囲気の人 came」というお互い壁がありますが、「ボッチャを楽しむ」という共通点により、だんだんと垣根がなくなっていくます。
- ボッチャを楽しむ過程で、障がいの特徴を理解してもらえたらと思います。

事例① 単元「ふくし交流会・ふくし年間プログラム」

単元のねらい	・地域でくらす障がいのある方のくらしや生活の工夫を知り、その人がその人らしいやりがいや楽しみをもってくらししていることを理解する。 ・障がいのある方との交流を通じて、同じ時間を共有し、お互いの違いを認め合い、相手の気持ちを想像して行動することは、障がいの有無に関わらず大切だと理解し、行動するきっかけとする。
単元の目標	○ 自分以外の人のからし、楽しみややりがいに興味を持つ。 ○ サポートの仕方を学び、自分にできることを考えることができる。 ○ 人それぞれの違いを知り、相手の気持ちを想像して行動できる。
想定される協力者	当事者（障がい者など）、福祉施設職員、ボランティア、社協



（5時間完了/計4日間）



学習活動	留意事項
「ふくして、どんなこと？」ワークショップ 【体験する・考える】 ・「ふだんのからしのしあわせ（ふくし）」の講義。 ・ユニバーサルデザインセットでの体験。	・「ふくし」は障がい者や高齢者を対象とする意味ではなく、自分自身に関係のあることだと理解する。
「身体に障がいのある講師のからしを知ろう」 【聞く】 ・当事者からくらしや生活の工夫、好きなこと、生活で困っていることなどの自己紹介や生活体験を聞く。 「どんな時にどんな支援が必要かを学ぼう」 【体験する】 ・当事者から関わる時に必要とする支援方法を教えてもらい伝えてもらい理解する。	・自己紹介を通じて、当事者のくらしや好きなことなどを理解する。  ・必要な支援があることで、その人がその人らしく、くらすことができることを理解する。

「当事者と子どもの持ち寄り企画で交流会」 【体験する】 当事者と子どもと一緒に楽しめるよう、これまでの関わりを活かして企画・準備し実施する。	- 当事者の好きなことや支援方法をもとに、講師と一緒に楽しむためにどんなことができるか工夫などを考える。 - 交流を通して、支援が必要であったり、必要でなかったりすることを理解する。
「ふくしの学びの報告会」 【まとめる・伝える】 これまで当事者と学んできた内容をまとめ発表する（例、当事者に伝える、下級生に伝えるなど）	当事者と関わった中で、「地域の中で自分たちにできることは何か」という、子どもたち自身が地域の一員として意識を持ち、行動できるよう促していく。

学 習 計 画

目 標	○ 当事者と一緒に楽しむためにどんなことができるか考える。 ○ 地域の様々な人たちと共に地域でくらししていくという気持ちを高める。
準 備	○ 交流内容を子どもが企画し、当日の情報保障・サポート方法などを考える。

段階	学習活動 (※聴覚障がい者の場合)	時間	留意事項
つかむ	(1) あいさつ、今日のながれの説明 ルール説明、グループごとに出題	5	声だけで進行しないように、紙に書いた進行表を使って、みんなが分かるように進める。
追及 する	(2) 子どもの企画「ジェスチャーゲーム」 身振りでお題を当てるクイズ  (3) 当事者の企画「絵手紙体験」 絵手紙の講師として子どもに教える →普段は絵手紙の先生として活動	80	- 子どもが当事者を「助けてあげたい」と思っていることを理解する。 - 工夫をすることで、障がい関係なく一緒に楽しむことができることを交流の過程で理解する。 - 交流企画内容が当事者にとって、どんな存在なのかを考える。
まとめる	(4) 学習を振り返る	5	交流から感じたことをふりかえる

事例② 単元「ふくしってな～に？ ～ユニバーサルデザイン学習～」

単元のねらい	ユニバーサルデザインについて学び、体験学習の過程を通じて、「ふくし」を自分事として捉え、課題を発見し、考える力を育み、「共に生きる」ことの大切さを理解する。
単元の目標	○ ユニバーサルデザインに関心を持ち、自ら学習を深めようとする。 ○ ユニバーサルデザイン学習を通して、全ての人の「ふだんのくらしのしあわせ」（ふくし）を考えることができる。 ○ ユニバーサルデザインに関する学びをまとめ、形にして伝えることができる。
想定される協力者	当事者（障がい者など）、福祉施設職員、ボランティア、社協



（3時間完了/計3日間）

学習活動	留意事項
「ふくしってな～に？」 【聞く】 ・「ふだんのくらしのしあわせ」（ふくし）講義を聞く。 【体験する・考える】 ・ユニバーサルデザインセットを使って理解する。 【まとめる・発表する】 ・調べたことをまとめ、発表する。	・「ふくし」とは何かを、自分自身の生活を含めて捉えられるように「ふだんのくらしのしあわせ」を理解する。 ・ユニバーサルデザインは「すべての人」が対象であることを通して、「ふくし」は自分自身も対象になることを理解する。
「やさしい町づくりワークショップ」 【体験する・考える】 ・まちの絵から「困っていること」を見つけ、それに対して自分ができていることを考える。 【発表する】 ・自分のできていることについて考えた内容を発表する。	・他者も含めた「ふくし」について、身近な生活場面で考える。 ・「困っていること」だけでなく、「その人に自分が何をできるか」「困らない社会にするために何が必要か」などを考えるきっかけとする。

「学校をピクトグラムでもっと分かりやすい学校へ」 【表現する】 学校の場所の案内表示を誰が見ても分かるように、ピクトグラムで表現する。	自分たちの通っている学校をフィールドに、初めて学校に来た人にも分かるようなピクトグラム(誰にでも伝わりやすいデザイン)を作成する。
「ふくしの学びの報告会」 【まとめる・伝える】 これまで当事者と学んできた内容をまとめ発表する(例、当事者に伝える、下級生に伝えるなど)	当事者と関わった中で、「地域の中で自分たちにできることは何か」という、子どもたち自身が地域の一員として意識を持ち、行動できるよう促していく。

学 習 計 画

目 標	○ 「ふくし」や「ユニバーサルデザイン」を知り、興味を持つことで学習意欲を高める。 ○ ユニバーサルデザインの教材を調べることで、「ふくし」を身近に感じ「自分ごと」として捉える。
準 備	○ ふくしやユニバーサルデザインについて話をするための資料作成 ○ ユニバーサルデザインの教材(道具)の準備

段階	学習活動	時間	留意事項
つかむ	(1) 「ふくし」・「ユニバーサルデザイン」について話を聞く 	15	・ユニバーサルデザインはすべての人が使いやすいものであることを理解する。
追及する	(2) ユニバーサルデザインの道具をグループで調べ、工夫を発見する (3) グループで発表しあう 	20	・ユニバーサルデザインとしての工夫に着目する。 ・「どんな時に役立つか」「どうして必要か」を理解する。 ・答えを教えるのではなく、子どもが工夫を発見する過程を大切にする。
まとめる	(4) 学習を振り返る	10	調べて発見した気づき、学びについてクラスで共有しふりかえる。

事例③ 「防災とふくし ～被災地の様子やクロスロードで学ぼう～」

ねらい	被災地の状況やボランティア活動の様子を知り、被災時に必要な「ふくし」について考える。災害が起きた際に、災害弱者（高齢者、障がい者、外国籍、妊婦など）がどんなことに困るかなどを理解していく。
目標	○ 被災地の様子や状況を知り、災害時のふくしを考える。 ○ クロスロードを行い、誰もが「ふだんのくらしのしあわせ」になるために、自分以外の立場を理解しあう大切さを学ぶ。
想定される協力者	社協（災害ボランティアセンター職員）、被災地ボランティア経験者

段階	学習活動	時間	留意事項
つかむ	(1) あいさつ、今日のながれの説明	5	
	(2) ボランティア活動先の被災地の状況説明 ・職員の被災地ボランティアの経験談 ・ふくしと防災って、どんな関係？	15	・被災地の状況を知ると共に、被災した時の気持ちを理解する。
追及する	(3) 防災啓発ゲーム「クロスロード」 ・正解のない「防災とふくし」の2択質問に対して、自分の意見とその理由を考えるクロスロードの体験。 ・クラス全体で意見と理由を共有する。 	20	・自分の意見や理由を考え、自分の価値観に気づく。 ・自分以外の人意見やその理由を理解し合う過程を重視する。 質問1 あなたは避難所の配膳係です 避難所にお弁当が届きました。しかし、避難所の100人に対して、50人分のお弁当しかありません。 次にいつお弁当が届くか分かりません。あなたはお弁当を避難所の人にくばりますか？  YES (くばる) or  NO (くばらない) 私はこちらの、かんがえ方。 YES 私はこちらの、かんがえ方。 NO
まとめる	(4) まとめ、ふりかえり	5	・誰もが「ふくし（ふだんのくらしのしあわせ）」を実現するためには、自分以外の人立場を考えることが大切なことを理解する。

ふくしの学びの相談は、 まずは江南市社会福祉協議会（社協）へ

社協では、よりよい福祉教育が実施できるよう、今回ご紹介した内容の他にもプログラム開発や情報提供をしています。

また、社協だけでは「福祉教育」を進めていくことはできません。地域・学校・社協が協働で役割を共有しながら進めていくことで、よりよい福祉の学びにつながっていきます。

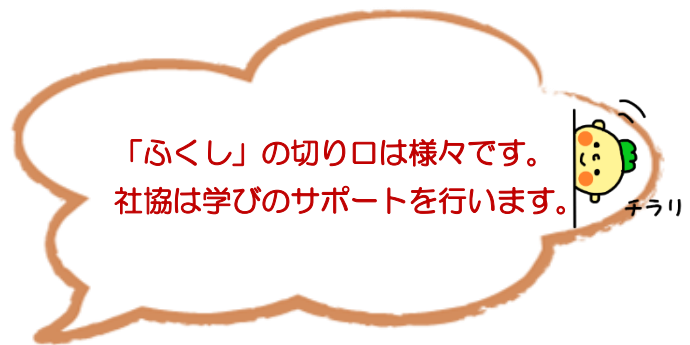
ぜひ、お気軽にご相談ください。

連絡先：江南市社会福祉協議会 電話：0587-55-5262

電子メール：chiiki@konan-shakyo.or.jp



▲社協職員による「ふくし」の出前講座



▲障がい当事者からのふくし講話（全体講義）



▲福祉分野のお仕事紹介（キャリア教育）



◀障がい者スポーツ体験から当事者の生活理解
写真（左）：ポッチャ、写真（右）：車いすバスケット

江南市社会福祉協議会のホームページでは、ふくしの学びに関する情報を随時更新しています。ぜひ、事前学習などにご利用ください。

江南市社会福祉協議会 ホームページ

URL : <https://www.konan-shakyo.or.jp>



▲社協 HP の QR コード



地域・学校・社協ですすめていくために共有したい役割

- 子どもたちへの働きかけ
- 保護者への働きかけ
- 地域の人を学校に受け入れる場づくり
- 学校から地域に出ていく場づくり
- 教職自身の研修の場の設定

- 地域の資源（ひと・もの）を増やす
- 学校行事への協力
- 多くの地域住民の地域活動参画推進
- 学校の取り組みを受け入れる意識づくり

学校

- 発展的で多様な福祉教育プログラムの企画
 - 【例】・ 問題解決のためのプログラム
 - ・ 地域に還元するためのプログラム
 - ・ 地域の人々が協働参画するためのプログラム
- 福祉教育サポーターの育成
- コーディネート（つなぎ役を果たす）
- 広報活動
- プラットフォーム（協働の場）の提供

地域

社協

全国社会福祉協議会 『福祉教育実践ガイド 地域福祉は福祉教育ではじまり福祉教育でおわる』（平成 24 年 3 月）から一部抜粋

【福祉教育ハンドブック作成にあたり】

本ハンドブックは、本会職員として 24 年勤務され、本会の福祉教育及びボランティア活動の推進にご尽力いただいた、元静岡福祉大学教授の（故）清水将一様より「福祉教育・ボランティアの発展のために活用してほしい」との想いで本会へご寄付いただいた寄付金を活用して作成いたしました。

ふ だんの
く らしの
し あわせの実現に向けて



しゃきょうくん
ふくしさん



江南市版 福祉教育ハンドブック

ふだんのくらしのしあわせの実現に向けて

編 集：社会福祉法人江南市社会福祉協議会

発 行：令和4年3月

住 所：〒483-8279 愛知県江南市古知野町宮裏 121 番地

電話・FAX：0587-55-5262

メール：chiiki@konan-shakyo.or.jp

ホームページ URL：<https://www.konan-shakyo.or.jp>



▲社協 HP の QR コード